

# 自宅での居住継続を支える近隣社会環境と住宅環境に関する研究

## Study on the Neighborhood Community and Residential Environment to Stable Living for Elderly

室崎千重 村井裕樹 橋詰 努 大原 誠

MUROSAKI Chie, MURAI Hiroki, HASHIZUME Tsutomu, OHARA Makoto

### キーワード：

高齢者、居住継続、助け合い、地域生活

### Keywords:

Elderly, Stable Living, Mutual assistance,  
Social Life in Community

### Abstract:

The community is declining because of an increase of elderly and a decrease in the number of homes. Various supports are needed so that elderly keeps living in the region. This paper is to find neighborhood community and cooperation system make possible to stable living for elderly.

The fields are three old newtowns. The main result that we obtained is as follows. It is necessary to design of the place and building of not only barrier-free but also residents gathering. The resident needs cooperation system, but there is some problem to be solved. Base for the community has a possibility to support stable living for elderly.

### 1 はじめに

急速な高齢化の進展によって、高齢者の一人暮らし・夫婦のみ世帯は年々増加を続けている。特に、高度成長期に大量に建設されたわが国の郊外団地の多くは、その物理的な老朽化に加えて、社会的な高齢化・人口減少が同時に進行している結果、団地居住者にとって住みにくい環境となっている。郊外団地における社会的環境の問題点は、その高齢化が地域社会の少子化・人口減少・世帯の小規模化とコミュニティ連帶の脆弱化を伴って進行しているところに

ある。2000年度から始まった介護保険制度があるが、必要な生活支援の内容に保険の適用外のものもあるなど限界も存在し、これのみで十分な支援が可能とは言えない。

高齢者居住継続するためには、地域の中で続けてきた何気ない暮らしの維持が重要である。孤立することなく、精神的にも豊かな生活を継続できる地域環境が求められる。このためには、住宅改修やまちのバリアフリー化などの物理的環境整備に加えて、生活支援の不足などの社会的環境改善が不可欠となる。

本研究は、開設から30～40年が経過した郊外団地を対象として、これらの抱える物理的・社会的再生に取り組むための課題を明らかにすることを目的とする。具体的には、①団地建替時の物理的環境整備で配慮すべき課題、②自宅の身近な場所にあるコミュニティ支援拠点の意義と課題、③居住者が持つ生活支援要求と相互扶助に関する意識を把握し、新たな共助システムの構築のための課題、を明らかにする。

### 2 調査の概要

本研究では、以下の3つの調査を実施した。調査対象地は、明らかにする課題ごとに地域環境の条件が適するものを選定したため、3箇所の異なる郊外団地となっている。分析は、地域に特化した課題と長期経過した郊外団地に共通する課題に分けて行っている。

#### 2.1 団地建物の建替後の一人暮らし高齢者の近所つきあい調査

大阪府に位置する香里団地を調査対象地とする。築40年以上が経過した、4～5階建て階段室型の住

棟（図1参照）から9階～10階建ての片廊下型・エレベーター付の住棟への建替が実施された地区を取り上げる。①団地建替時の物理的環境整備で配慮すべき課題を明らかにするため、バリアフリー化などの物理的環境整備後に戻り入居した高齢者を対象に、日常生活の建替え前後の変化について、2007年10月にヒアリング調査を実施した。

## 2.2 県営住宅を利用したコミュニティ拠点の調査

2006年度から継続して、兵庫県に位置する明石舞子団地（以下、明舞団地）の県営住宅を利用したコミュニティ拠点創設の取り組みを取り上げる。②自宅の身近な場所にあるコミュニティ支援拠点の意義と課題を明らかにするため、継続的に利用状況調査とスタッフへのヒアリング調査を実施した。

## 2.3 地域住民の助け合い意識と先行事例調査

兵庫県に位置する明舞団地および北須磨団地を対象地とする。③居住者が持つ生活支援要求と相互扶助に関する意識を把握し、新たな共助システムの構築のための課題を明らかにするため、2006年11月に明舞団地内の松が丘地区（明石市）住民を対象に実施した助け合いに関するアンケート調査の詳細分析を実施した。更に、具体事例として、明舞団地において2007年7月から始まった「明舞お助け隊」の試みと、北須磨団地において2006年から実施している地域内の助け合い活動の事例調査を実施した。

## 3 団地建物の建替による一人暮らし高齢者の近所つきあいの変化

### 3.1 調査対象地の概要

調査対象地は、大阪府枚方市の西南部、寝屋川市と接する丘陵地に位置する香里団地である。全体の開発面積は155ha、A～E地区という5つのブロックから構成される。当初の計画人口22,000人、計画戸数5,850戸、賃貸集合住宅と分譲戸建て住宅が混在する大規模住宅団地であった。入居開始は1958年であり、1968年までの約10年間でほぼ入居が完了している。供給された住戸プランは、単身者向けの1DK、新婚夫婦向けの2K、2DK、家族向けの3DK、4Kであり、3階、5階建ての中層棟を中心であった。

団地開設から40年近くが経過した1994年頃から、住棟の建替が順次行なわれている。A地区が1994年に、続くB地区は1996年に着手された。A地区はみずき街となり1998年に入居、B地区はけやき東街と

なり2001年に入居となった。C地区は2002年に着手し、2006年に入居が完了している。残るD地区とE地区は、現在はそのままの状況である。

本調査は、元B地区であるけやき東街を対象とする。けやき東街は、香里団地のほぼ中心に位置する商業や公共施設などの地区センターを含む地区である。元B地区の賃貸住宅棟は1958～1961年に入居しており、当初からの入居者の居住年数は50年近くになる。建替前の住戸総数1075戸に対し、建替後は773戸である。建替後の戸数が従前よりも減少したのは、計画容積率の低減ではなく、民間事業者への土地の一部売却により敷地面積が減少したためである。従前35～45%であった容積率が、建替後は130～140%と3～4倍に、従前3～5階の住棟が5～10階となり、従前のまちの様子からは大きく変化している。



図1 階段室型の住棟  
Fig. 1 Apartment house of direct access



図2 建替後の景観  
Fig. 2 Townscape of rebuilding

### 3.2 調査対象者の概要

調査対象者は、けやき東街に現在居住しており、かつ建替前のB地区にも10年以上居住していた一人暮らし高齢者である。2001年に戻り入居しているため、調査時点で新しい住棟に6年居住している。自治会長から紹介いただいた7名に対して2007年10月にヒアリング調査を実施した。対象者の概要を表1に示す。また、主な質問項目を表2に示す。

表1 調査対象者の概要  
Table 1 Outline of subjects

	年齢	性別	居住年数	前住棟の建物形状・居住階	現住棟の建物形状・居住階
A	76	女	20年近く	階段室型・平板形 5階建(1階)	EV付片廊下 9階建(4階)
B	76	女	30年	階段室型・平板形 5階建(2階)	EV付片廊下 9階建(8階)
C	73	女	48年(9年)	階段室型・星形 5階建(1階)	EV付片廊下 9階建(3階)
D	82	女	16年	階段室型・平板形 5階建(1階)	EV付片廊下 9階建(6階)
E	82	女	49年(27年)	階段室型・平板形 4階建(2階)	EV付片廊下 10階建(8階)
G	87	女	49年(37年)	階段室型・平板形 4階建(1階)	EV付片廊下 10階建(3階)
H	76	女	49年(11年)	階段室型・平板形 4階建(3階)	EV付片廊下 10階建(8階)

※1:居住年数の( )内は、そのうちの一人暮らしでの居住年数を示す  
※2:建物形状の( )内は、調査対象者の居住階を示す

表2 ヒアリング調査の質問項目  
Table 2 Question for questionnaire

属性	性別・年齢・居住年数・居住階 前住棟の地区・住棟・居住階
建物・住宅	建替後の居住棟・階の選択理由 建替後の団地内の景観について 建替後の建物・住戸内について
日常生活	外出頻度・外出時間・外出目的 建替前後の近所つきあい変化 近所での見守りについて 趣味の会・自治会への参加状況 今後の居住継続の意向

表3 近所つきあいの変化  
Table 3 Change in one's neighbors

年齢	顔見知りの数	近所つきあい	人と出会う回数(住棟まわり)	家の行き来	日常の買い物	住戸内について	団地内景観について	その他
A 76	増	増	-	週に10回くらい (主に友人が来る)	週に1回くらい	パリアフリーで住みやすい。 一人で倒れると非常ベルは役に立たない。	家にいるのが好きなので、外のことなどは何も思わない	この棟に来て、自治会に初めて入って知り合い増えた。趣味の会などにも積極的に参加。自分から人に声をかけたり、あちこちに出向いている。
B 76	同じ程度	減	減	減 現在は友人2人が週に1回程度来る	3日に1回くらい	1DKから2DKにしたので広くてよい。 見晴らしがいい。	高層になったのでベランダから道を歩いている人に声をかけられなくなった。	出かけても、3、4日人に会わないと多く、陸の孤島みたい。 エレベーターになって上り下りで人にあわなくなつた。 ベランダの隣で板が高くなり、お隣に声をかけられない。
C 73	増	増	同じ程度	増、週に2~3人 (退職し時間ができた人が増えた)	週に2、3回くらい	トイレもお風呂も広くなつたし、便利さは最高。 住戸内の緊急ベルは一人暮らしには役に立たない。	高い建物が林立して、見晴らしが悪くなつた	エレベーターで会った人には自分から声をかける。 自分が出かけない人の環は小さくなる。方だ。4階の人の家の鍵を預けあう。同じ階の人とは、朝刊の取り込みの見守りをお互いにやっている。
D 82	減	減	減	月に1回くらい (他に家以外で、カラオケなどでも会う)	毎日(通院の帰りに寄っている)	隣の音が聞こえない、段差ががない、手すりがついていない。 住戸内緊急ベルは役に立たない。	よく出歩いているし、変わつて寂しいとか思わない。	最近はめったに会わないでの、会うと立ち話することが多い。 コミ捨て場のところによく立ち話をしていたが、今はそれなくなつた。 毎日誰かとは出会っていたが、今は2、3日誰とも会わないこともある。
E 82	減	やや減	減の気がする	あまりない (仲良くなっていた人が去年亡くなった)	2日に1回くらい	以前は窓が2面あったが、今は1面しかなく風が通りない。エアコンをつけるしかない。	以前は緑がたくさんあった。今は殺風景だけ仕方がない。圧迫感がある。以前は下着でベランダに出たが今はそんな雰囲気ではない。	子どものところにやっかいになりたくないのに、ここに住むしか選択肢がない。 団地内に喫茶店など、友人とおしゃべりできる場所がもっとあるといい。 日誰ともしゃべらない日もある。さみしいなんていってらんない。
G 87	同じ程度	減	減	減	2~3日に1回くらい	段差がなくなつてよい。浴槽の高さが、低くなつて入りやすくなつた。新しくてよい。	以前と建物は変わつたけれど、違和感はない。 線がもう少し多かつたらしい。	建物が新しくなつて、みんながそこに戻る話を聞くと、自分と一緒に戻りたいと思っていた。 前は外に出たら誰かにしようつゆう会つてたが、今は会わないで寂しくはある。
H 76	同じ程度	同じ程度	減	増 (以前は全然なし)	毎日	以前は窓が2面あってよかった。 手すりがあると安心感がある。玄関から出たところが広くなつた。	今の方がいい。建物の高さはこんなものと思う。お花とか近くで育てられないのは寂しい。 住棟間隔が以前はもっと広くのびのびしていた。	歩いて10分くらいのところの市民農園に毎日通う。 普段は多くてもあまりしない。 お昼ごはんを食べに行けるところが団地内にない。

### 3.3 個別事例を通してみる生活変化

ヒアリング調査の主な結果を表3に示す。住棟内の顔見知りの数、近所つきあいの頻度を見ると、建替前後で増えた人・減った人・同じ程度の人が存在している。近所つきあいが増えた事例AとCは、積極的にあちこちへ出かけ、自分から人に声をかけるようにしており、顔見知りの数も以前より増加している(表3)。事例Cは、この理由として定年などで近所の人に時間的余裕ができたことも挙げている。一方、近所つきあいが減ったのは事例B、D、E、Gの4例である。顔見知りの数は同程度という事例B、Gと、顔見知りの数も減ったという事例D、Eがある。この4事例とともに、住棟内で近所の人に出会う回数が建替後は減少し寂しい、と感じている。最後に近所つきあいは変わらない事例Hは、顔見知りの数は同程度であるが、住棟内で近所の人に出会う回数は減っている。7事例中の5事例は、住棟内で近所の人と出会う回数が減ったと感じ、その中の4事例で近所つきあいが減少している。出会う機会の減少に関する環境の変化について、以下に取り上げる。

#### (1) エレベーター

以前は、移動には階段を上り下りする必要があり、この途中で近所の人に偶然に会うことも多かった。途中階の顔見知りの家にも、ふと気が向けば立ち寄ることができた。現在は、エレベーターでの移動を中心である。エレベーターは、近所の人と乗り合わせることも少なく、移動中に出会う回数が減少している。また、普段は自宅階と地上以外に降りること

がほとんどなく、顔見知りの人の住む他階に、用事がないのに立ち寄りはしない。しかし、エレベーターが出来て体力的には非常に楽になったと感じており、移動手段としては不可欠なものとなっている。

#### (2) ゴミの回収システム

以前は、決まった曜日・時間にゴミを出す必要があったため、ゴミ回収日は、近所の人たちと決まって立ち話をする時間にもなっていた。現在は、ゴミが當時捨てられる回収システムに変わり、ゴミを出す際に近所の人と会うことがほとんどなくなっている。便利になったと評価しているが、出会いの機会の減少ともなっている。

#### (3) 建物の高層化

以前は、4～5階建てで地上と住棟バルコニーや玄関との間で気軽に声をかけあっていた。階段側の地上にゴザを敷いて、近所の人たちとお茶を飲んだという話も聞かれた。現在は、地上と住棟の間で声をかけることはなく、屋外空間でゴザを敷き集まる場所もなくなっている。また、以前はバルコニーに下着が出られるような雰囲気であったが、現在はそんなことはできないと話す人もおり、団地全体の雰囲気が、居住者にとって下町のような親密な空間ではなくなっていることがうかがえる。

#### (4) 住戸内

バルコニー間の隔て板の高さが、以前は隣人の顔が見える高さであったが、現在はより高くなり、隣人の顔は見えない。プライバシーがある反面、バルコニーでの隣人同士の会話はなくなっている。住戸内部は、綺麗になった、段差がなくなった、手すりがついた等、バリアフリー化への評価は大きい。住戸内設備へは不安もある。浴室やトイレに設置される呼び出しボタンの音声は住戸内にしか鳴らないため、一人暮らしで倒れた際に押しても意味がないとの話が聞かれた。

#### 3.4 小括

建替による団地環境の変化は、高齢者にとってバリアフリーなど便利になったと評価される面がある一方で、日常的な出会いの場が減少していることがわかった。同じ棟に住んでいても、出会わないと近所つきあいが結果として減少している。また、かつては、子どもを通じた知り合いもや友人関係もつくられていたが、高齢になると新たな人との繋がりが増える機会も減少し、死亡や転出等により既存の友人や知人も減少しがちになる。

バリアフリー化などの物理的環境整備のみではなく、便利になった反面で失われる可能性のある出会いの場についても計画する視点が必要である。

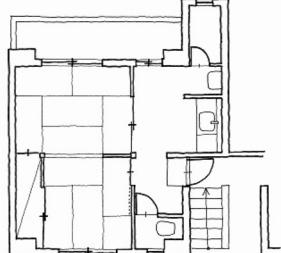
## 4 県営住宅でのコミュニティ拠点利用調査

### 4.1 調査対象住戸・団体の概要

調査対象地は、神戸市と明石市に位置する、約197haの明石舞子団地（以降、「明舞団地」と省略）である。入居開始は1964年（昭和39年）であり、団地開設から40年以上が経過している。

明舞団地内の県営住宅の1階空き住戸（40m<sup>2</sup>程度）を利用して<sup>注1)</sup>、NPOが団地内の高齢者の介護予防・多世代交流のためのオープンスペースの創設を目指して2006年6月から活動している。このNPOは、神戸市内で高齢者・障害者を対象に福祉サービスを提供している団体である。表4に調査対象拠点と活動団体の概要を示す。

表4 活動団体の概要  
Table 4 Outline of nonprofit organization

運営主体	NPO法人（神戸市兵庫区）
活動拠点	明石市松が丘1丁目 県営住宅1階
活動開始時期	2006年6月～
活動内容	①手芸や絵手紙、おしゃべりなど ②集会所でのカラオケ ③介護相談
活動日	○月曜日～金曜日 AM10:00～15:00
参加費	1日：200円
人員配置	2～3人、スタッフは全員ヘルパー資格有
県営住宅 プランと面積	 2 K / 39.41 m <sup>2</sup> (基準法)



### 4.2 活動内容と利用状況

2006年6月に拠点を開設した時点では、団地外で活動する団体であるため住民に馴染みが無く、当初は利用者がいない日が続いた。毎月の利用者数の推移を表5に示す。開設から半年経過したあたりから、利用者が増え始め、9ヶ月経過の時点で1日平均2.5人程度、2007年末には1日平均5人程度の利用となっている。地域に浸透するまでには、ある程度

の期間が必要であることがわかる。利用者は、女性が多く、男性は全体の2割程度である。

主な活動内容と参加者数を表6に示す。拠点住戸内の手芸、おしゃべりと、集会所で週1回行うカラオケに参加者が多い。カラオケを通じて出会った住民同士が仲良くなり、集会所での活動がない日に近所のカラオケボックスに通うグループも見られるようになった。また、直接の活動への参加者以外にも、お裾分けを定期的に持って来て玄関先でおしゃ

表5 各月の利用者数  
Table 5 Number of users every month

	運営日数	利用者人数	平均人数
2006年	6月	8	0.25
	7月	16	0.31
	8月	21	0.43
	9月	20	0.05
	10月	23	0.30
	11月	23	0.87
	12月	22	1.09
2007年	1月	19	1.05
	2月	18	3.50
	3月	20	2.80
	4月	19	3.21
	5月	19	2.53
	6月	19	3.53
	7月	18	3.28
	8月	20	2.95
	9月	17	4.76
	10月	20	5.10
	11月	18	5.78
	12月	14	5.07
2008年	1月	18	5.61
	2月	18	5.44
	合計	390	2.71

※利用者人数の( )内は、そのうちの男性数

表6 主な活動内容と参加者数  
Table 6 Main content of activity

	主な活動内容への参加者数										その他の来訪者数					
	おしゃべり	手芸・工作	カラオケ	将棋・オセロ	映画	絵手紙	パズルなど	遊び(子ども)	パソコン教室	英語	単発イベント	お裾分け	Kさんお裾分け	相談(住民)	相談(福祉関係者)	見学(住民)
6月	2															4
7月	3											1	2		1	2
8月	1												1			
9月					1											2
10月	1			3		2		1			1	1				4
11月	3	2		1	4	3						2				1
12月			2			5	1				15		2	1	2	
1月	3	5	4						4				2	2	2	
2月	3	20	32		4				2				3	3		
3月	3	10	28	2	12							3	5	2	1	
4月	8	10	28	2	8				1	1			2	3		
5月	8	20	16		3					1			1			
6月	9	19	32		5								2			
7月	11	15	28	2	4	1	2									1
8月	12	15	28		15	3	4					1	2			1
9月	9	11	29	3	4		2				23		1	1	1	
10月	17	50	30			5					3	3	2			1
合計(人)	93	179	255	14	64	13	13	8	8	2	41	11	26	11	2	22

べりをする高齢女性があり、拠点スタッフと近所つきあいに似た関係ができている。また、福祉・介護関係の相談事も寄せられ、スタッフが地域の福祉職に繋ぐ役割を果たしている。よく来る利用者がしばらく来ないと、自宅へ電話をかけるなど見守りの役割を果たしている側面もみられる。

よく利用している高齢者の感想としては、「家でテレビを見るだけであまりしゃべる機会がなかったが、ここに来てしゃべれて楽しい。」(一人暮らし高齢女性) や、「今まででは、少し遠い手芸クラブに行っていたが、近くに通える場所が出来てすごく楽しい。」(夫婦のみ世帯の高齢女性) などが挙がっている。

#### 4.3 空間の利用方法

拠点活動における室内の利用例を、図3に示す。和室2間(4畳と6畳)を別々に利用したり、襖を取り外し一体的に利用したりしている。また、畳に座ったり、昼寝をしたり、椅子に座ったり多様な姿勢が可能であり、自然に行なうことができる。家具の配置によって、多様な利用形態をつくっている。住宅空間であるため、中に入ると非常に落ち着くことに加えて、この柔軟な利用が可能であることが空住戸を活用している魅力のひとつである。

#### 4.4 利用者の居住位置

2006年6月の拠点運営の開始から2008年2月末の間に、拠点を1回でも利用した人数は84名であった。利用回数ごとの利用者数を表7に示す。ある程度固定したメンバーが頻繁に利用していることがわかる。また、図4に示す利用者の居住位置をみると、大半が半径200m圏内である。利用回数が21回以上になると、半径100m圏内の割合が増加している。

表7 利用回数ごとの人数  
Table 7 Frequency used

利用回数	人 数
1~3回	49
4~10回	14
11~20回	7
21~50回	8
51回以上	6
合計	84

#### 4.5 小括

拠点での活動は、半径200m圏内に居住する高齢者にとって、居場所や新しい趣味の繋がりが生まれる場としての役割を担い、見守りや相談ごとの解決など、生活支援の役割も果たしている。しかし、現状の拠点住戸の大きさでは、6~7名が同時に訪問すると部屋は一杯になり、団地内的一部にしかサービスを提供できない状況である。今後、この様な拠点をきめ細やかに配置しようとすると、スタッフの確保など人材の問題が課題となる。

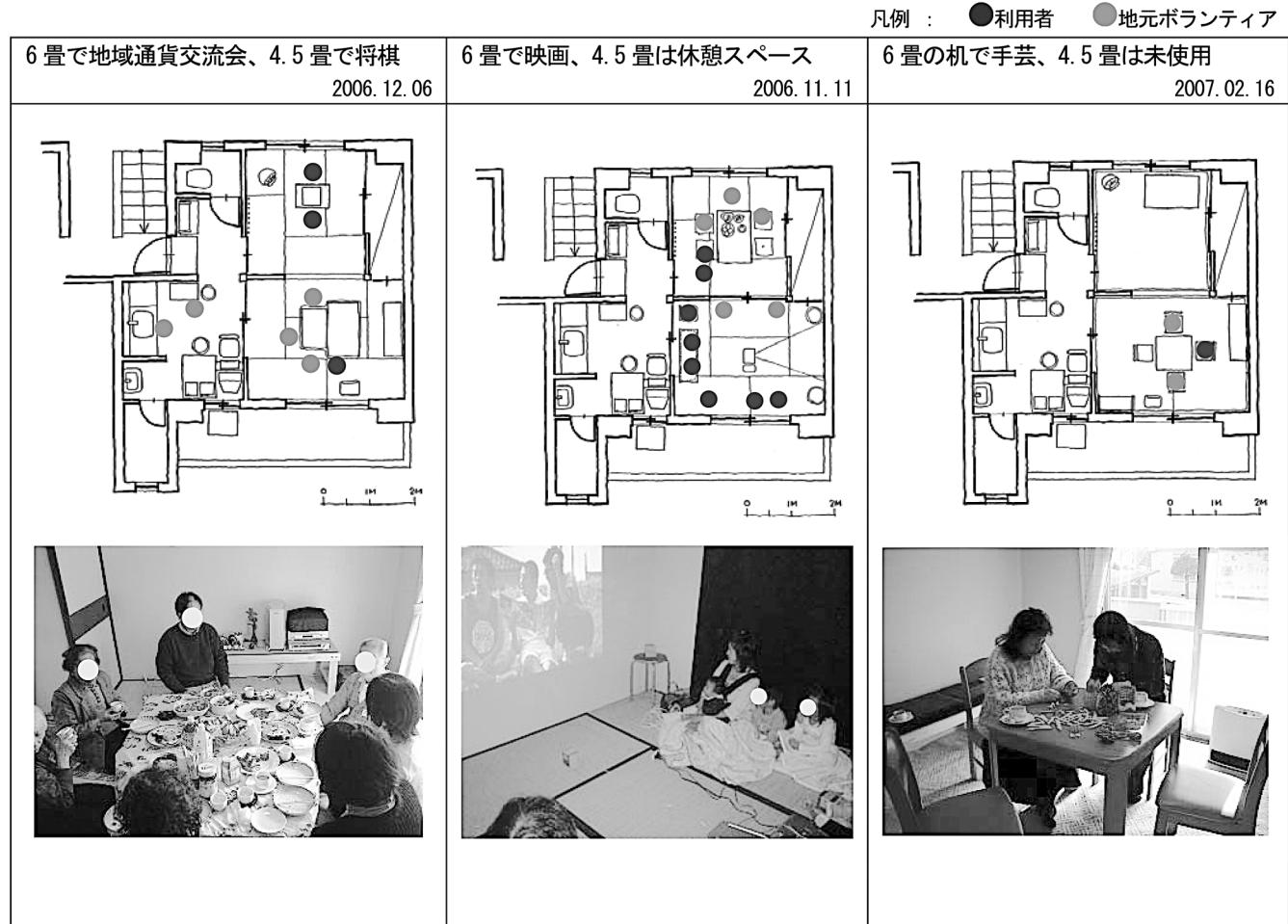


図3 室内空間の利用例  
Fig. 3 Layout patterns of interior

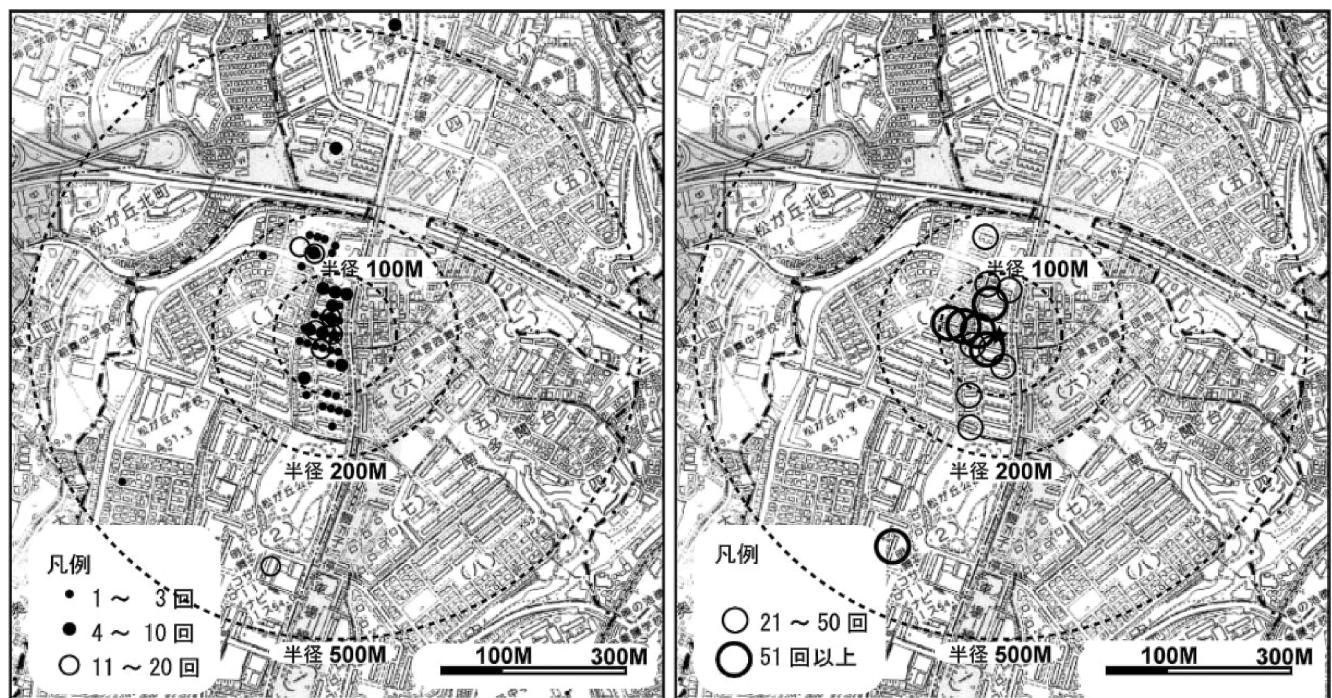


図4 利用者の居住地  
Fig. 4 User's place of residence

## 5 地域内の助け合いへの住民意識

### 5.1 地域内の助け合いへの住民意識

長期経過した郊外団地での住民意識調査を明舞団地内の松が丘地区（明石市）を対象として2007年11月に実施した（表8）。平成18年度報告集<sup>1)</sup>に詳しい調査の概要と結果を掲載している。ここでは、その中の地域内の助け合いに関する住民意識について、属性別に詳細な分析を行ったので報告する。

表8 アンケート調査の概要  
Table 8 Question for questionnaire

対象地	兵庫県明石市松が丘地区 抽出配布
配布・回収	対象住戸へポスティング・料金後納郵便
調査時期	2006年11月14日—30日
調査票数	1370戸（2740票）
※各戸2票配布	県営住宅490戸/機構住宅276戸/ 公社分譲282戸/戸建住宅322戸
回収票数 回収率	配布票数ベース 790票（28.83%） 県営住宅 251票（25.6%）/機構住宅 126票 (22.8%)/公社分譲149票（26.4%）/戸建住宅264 票（41.0%） 配布戸数ベース 532戸（38.10%） 県営住宅 190戸（38.8%）/機構住宅 85戸 (30.8%)/公社分譲97戸（34.4%）/戸建住宅160 戸（25.6%）

### 5.2 生活支援要求の各属性の特徴

「手伝ってほしいこと」（生活支援要求）と「手伝えること」（支援提供）に該当するものを、21項目（表9、10の左側項目）から複数回答方式で選択

表9 年齢別 手伝えること（シーズ）  
Table 9 Content that can be helped

手伝えること	20～39歳		40～59歳		60～79歳		80歳以上			
	N=27	N=120	N=310	N=23	人数	ケース%	人数	ケース%	人数	ケース%
洗濯	0	0.0%	6	5.0%	34	11.0%	2	8.7%		
掃除	0	0.0%	11	9.2%	37	11.9%	3	13.0%		
食事づくり	0	0.0%	10	8.3%	22	7.1%	1	4.3%		
ゴミすて	7	25.9%	49	40.8%	112	36.1%	8	34.8%		
粗大ゴミ出し・家具移動	2	7.4%	25	20.8%	39	12.6%	2	8.7%		
草むしり	0	0.0%	21	17.5%	82	26.5%	7	30.4%		
電球交換	7	25.9%	30	25.0%	48	15.5%	5	21.7%		
パソコンアドバイス	6	22.2%	14	11.7%	19	6.1%	1	4.3%		
日曜大工	1	3.7%	16	13.3%	32	10.3%	3	13.0%		
ペットの世話	0	0.0%	11	9.2%	11	3.5%	1	4.3%		
配食サービス	0	0.0%	6	5.0%	15	4.8%	2	8.7%		
送迎サービス	2	7.4%	14	11.7%	25	8.1%	2	8.7%		
買い物代行	1	3.7%	42	35.0%	58	18.7%	4	17.4%		
おしゃべり相手	4	14.8%	23	19.2%	81	26.1%	2	8.7%		
外出同行	1	3.7%	21	17.5%	45	14.5%	2	8.7%		
薬の受取代行	0	0.0%	29	24.2%	56	18.1%	3	13.0%		
子ども一時預かり	5	18.5%	7	5.8%	18	5.8%	0	0.0%		
子育て相談	0	0.0%	4	3.3%	15	4.8%	1	4.3%		
役所手続き代行	1	3.7%	13	10.8%	36	11.6%	4	17.4%		
町内役員代行	0	0.0%	6	5.0%	19	6.1%	1	4.3%		
他世代交流	8	29.6%	8	6.7%	47	15.2%	1	4.3%		
その他	2	7.4%	8	6.7%	43	13.9%	9	39.1%		
合計	47	174.1%	374	311.7%	894	288.4%	64	278.3%		
平均の項目選択数	1.74		3.12		2.88		2.78			

凡例 ■ :最も割合の高い項目 ■ :2番目に割合の高い項目

してもらった。年齢別の「手伝えること」を表9に、「手伝ってほしいこと」を表10に示す。

20～39歳の若年世帯は、手伝ってほしいこと（ニーズ）として「子どもの一時預かり」が最も高く、「他世代交流」も必要としている。手伝えること（シーズ）は自分の用事のついでに出来ることや軽作業が多い。40～59歳では、ニーズとして「草むしり・庭の手入れ・水やり」や「役所手続き代行」などが高い。これは、就労により日中に時間が取りにくいためと推察される。シーズとして「粗大ゴミ出し・家具移動」の力仕事を2割も提供できるのはこの世代のみである。60～79歳では、シーズとして実施するには時間が必要となる項目を提供できる割合が増加しており、定年により時間にゆとりが生じるためと推察される。注目されるのは、高齢になるほど「洗濯」「掃除」「食事づくり」「買い物代行」といった日常生活での機能的な項目へのニーズが加わるようになり、求める支援項目が増加することである。80歳以上では、「ゴミすて」のニーズが急増し、併せて「おしゃべり相手」「外出同行」のニーズも最も高くなる。80歳以上になると、体力面などから日常の外出が困難になるためと推察される。全世代に共通しているのは、「粗大ゴミ出し・家具移動」という人手のいる力仕事へのニーズが高いことである。

各世代の「手伝ってほしいこと」「手伝えること」の平均の項目選択数を比較すると、20～39歳と80歳以上の世代が「手伝ってほしいこと」の項目数が「手伝えること」の項目数を上回っている。また、各世代の全体像から支援要求と支援提供の要望を①

表10 年齢別 手伝ってほしいこと（ニーズ）  
Table 10 Content that want you to help

手伝ってほしいこと	20～39歳		40～59歳		60～79歳		80歳以上			
	N=31	N=105	N=345	N=53	人数	ケース%	人数	ケース%	人数	ケース%
洗濯	0	0.0%	3	2.9%	16	4.6%	3	5.7%		
掃除	0	0.0%	7	6.7%	43	12.5%	7	13.2%		
食事づくり	0	0.0%	5	4.8%	23	6.7%	6	11.3%		
ゴミすて	2	6.5%	8	7.6%	37	10.7%	12	22.6%		
粗大ゴミ出し・家具移動	7	22.6%	44	41.9%	133	38.6%	22	41.5%		
草むしり	2	6.5%	26	24.8%	89	25.8%	12	22.6%		
電球交換	2	6.5%	9	8.6%	45	13.0%	8	15.1%		
パソコンアドバイス	5	16.1%	16	15.2%	57	16.5%	5	9.4%		
日曜大工	5	16.1%	10	9.5%	53	15.4%	11	20.8%		
ペットの世話	0	0.0%	5	4.8%	8	2.3%	4	7.5%		
配食サービス	1	3.2%	18	17.1%	37	10.7%	11	20.8%		
送迎サービス	1	3.2%	12	11.4%	34	9.9%	6	11.3%		
買い物代行	2	6.5%	11	10.5%	32	9.3%	10	18.9%		
おしゃべり相手	1	3.2%	8	7.6%	19	5.5%	6	11.3%		
外出同行	1	3.2%	9	8.6%	21	6.1%	6	11.3%		
薬の受取代行	0	0.0%	4	3.8%	21	6.1%	2	3.8%		
子ども一時預かり	10	32.3%	8	7.6%	6	1.7%	0	0.0%		
子育て相談	3	9.7%	2	1.9%	3	0.9%	0	0.0%		
役所手続き代行	3	9.7%	23	21.9%	30	8.7%	11	20.8%		
町内役員代行	2	6.5%	32	30.5%	38	11.0%	3	5.7%		
他世代交流	7	22.6%	18	17.1%	59	17.1%	3	5.7%		
その他	4	12.9%	6	5.7%	56	16.2%	11	20.8%		
合計	58	187.1%	284	270.5%	860	249.3%	159	300.0%		
平均の項目選択数	1.87		2.70		2.49		3.00			

凡例 ■ :最も割合の高い項目 ■ :2番目に割合の高い項目

表11 65歳以上の家族類型別 手伝ってほしいこと（ニーズ）・手伝えること（シーズ）  
Table11 People of 65 years or over/ Content that can be helped and Content that want you to help

手伝ってほしいこと	一人暮らし		夫婦のみ		その他		手伝えること	一人暮らし		夫婦のみ		その他		
	N=82		N=164		N=75			N=53		N=137		N=65		
	人数	ケース%	人数	ケース%	人数	ケース%		人数	ケース%	人数	ケース%	人数	ケース%	
洗濯	0	0.0%	13	7.9%	4	5.3%	洗濯	6	11.3%	15	10.9%	5	7.7%	
掃除	9	11.0%	24	14.6%	9	12.0%	掃除	7	13.2%	15	10.9%	6	9.2%	
食事づくり	6	7.3%	12	7.3%	6	8.0%	食事づくり	5	9.4%	8	5.8%	5	7.7%	
ゴミすて	12	14.6%	22	13.4%	10	13.3%	ゴミすて	12	22.6%	49	35.8%	26	40.0%	
粗大ゴミ出し・家具移動	34	41.5%	68	41.5%	29	38.7%	粗大ゴミ出し・家具移動	5	9.4%	17	12.4%	8	12.3%	
草むしり	21	25.6%	45	27.4%	21	28.0%	草むしり	8	15.1%	40	29.2%	21	32.3%	
電球交換	18	22.0%	21	12.8%	7	9.3%	電球交換	4	7.5%	28	20.4%	9	13.8%	
パソコンアドバイス	6	7.3%	27	16.5%	21	28.0%	パソコンアドバイス	1	1.9%	9	6.6%	3	4.6%	
日曜大工	11	13.4%	28	17.1%	16	21.3%	日曜大工	5	9.4%	15	10.9%	9	13.8%	
ペットの世話	3	3.7%	3	1.8%	2	2.7%	ペットの世話	4	7.5%	3	2.2%	2	3.1%	
配食サービス	13	15.9%	21	12.8%	8	10.7%	配食サービス	4	7.5%	6	4.4%	2	3.1%	
送迎サービス	7	8.5%	21	12.8%	8	10.7%	送迎サービス	4	7.5%	11	8.0%	5	7.7%	
買い物代行	10	12.2%	20	12.2%	10	13.3%	買い物代行	8	15.1%	22	16.1%	12	18.5%	
おしゃべり相手	9	11.0%	6	3.7%	6	8.0%	おしゃべり相手	15	28.3%	35	25.5%	14	21.5%	
外出同行	6	7.3%	13	7.9%	7	9.3%	外出同行	3	5.7%	19	13.9%	11	16.9%	
薬の受取代行	4	4.9%	12	7.3%	5	6.7%	薬の受取代行	4	7.5%	25	18.2%	13	20.0%	
子ども一時預かり	0	0.0%	3	1.8%	2	2.7%	子ども一時預かり	2	3.8%	7	5.1%	4	6.2%	
子育て相談	1	1.2%	2	1.2%	0	0.0%	子育て相談	1	1.9%	7	5.1%	5	7.7%	
役所手続き代行	10	12.2%	17	10.4%	7	9.3%	役所手続き代行	4	7.5%	18	13.1%	11	16.9%	
町内役員代行	11	13.4%	14	8.5%	8	10.7%	町内役員代行	2	3.8%	10	7.3%	3	4.6%	
他世代交流	8	9.8%	24	14.6%	18	24.0%	他世代交流	6	11.3%	20	14.6%	12	18.5%	
その他	12	14.6%	32	19.5%	5	6.7%	その他	13	24.5%	24	17.5%	4	6.2%	
合計	211	257.3%	448	273.2%	209	278.7%	合計	123	232.1%	403	294.2%	190	292.3%	
平均の項目選択数	2.57		2.73		2.78		平均の項目選択数	2.32		2.94		2.92		

凡例 ■:最も割合の高い項目 □:2番目に割合の高い項目

主に支援してもらう「支援要求型」、②主に支援を提供する方が多い「支援提供型」、③支援要求も提供も同程度である「双方型」の3つのタイプに分類してみると、80歳以上が支援要求型、40～59歳が支援提供型、20～39歳、60～79歳が双方型と考えられる。世代ごとに傾向が分かれることが明らかになった。

65歳以上を家族3類型別に見たものを表11に示す。ニーズとしては各類型ともに「粗大ゴミ出し・家具の移動」40%程度、「草むしり・庭の手入れ・水やり」25～28%と多い。一人暮らし世帯は「電球交換」22.0%、「おしゃべり相手」11.0%が他2類型と比べて最も多い。シーズは、一人暮らし世帯は「おしゃべり相手」28.3%と高くなっている。

各類型の平均の項目選択数を比較すると、一人暮らし世帯のみが「手伝ってほしいこと」の項目数が「手伝えること」の項目数を上回っているが、平均の項目選択数はいずれも他2類型よりも少ない。一人暮らし世帯は、支援を必要としているが、それを訴えない傾向も見てとることができ、地域内の見守りを含めた支援が必要であると考えられる。

### 5.3 生活支援要求のニーズとシーズ

地域内での助け合いのしくみを成立させるためには、生活支援要求（ニーズ）とそれを提供する人材（シーズ）の各項目における量とそのバランスが重要である。そこで、各項目をニーズとシーズのバラ

ンスから以下の4つの類型<sup>注2)</sup>に分けた。①需要が大きく、供給も大きい。②需要は大きいが供給が小さい。③需要が小さいが供給が大きい。④需要が小さい、供給も小さい。この結果を示したものが表12である。

表12 ニーズとシーズのバランス  
Table12 Balance of needs and seeds

	手伝ってほしい(ニーズ)		手伝える(シーズ)		バランス	
	N=583	ニーズ 人数 ケース%	N=483	シーズ 人数 ケース%	/ニーズ	
<b>① 需要が大きく、供給も大きい</b>						
草むしり	131	24.3	111	23.0	1.18	
掃除	59	11.0	52	10.8	1.13	
電球交換	66	12.3	90	18.6	0.73	
買い物代行	57	10.6	105	21.7	0.54	
役所手続き代行	68	12.6	54	11.2	1.26	
他世代交流	88	16.4	64	13.3	1.38	
日曜大工	80	14.9	52	10.8	1.54	
●ゴミすて	61	11.3	178	36.9	0.34	
●粗大ゴミ出し・家具移動	208	38.7	68	14.1	3.06	
<b>② 需要が大きいが、供給が小さい</b>						
送迎サービス	55	10.2	43	8.9	1.28	
パソコンアドバイス	84	15.6	40	8.3	2.10	
町内役員代行	76	14.1	26	5.4	2.92	
配食サービス	68	12.6	23	4.8	2.96	
<b>③ 需要は小さく、供給は大きい</b>						
おしゃべり相手	35	6.5	112	23.2	0.31	
薬の受取代行	29	5.4	89	18.4	0.33	
外出同行	38	7.1	69	14.3	0.55	
<b>④ 需要が小さく、供給も小さい</b>						
子育て相談	9	1.7	21	4.3	0.43	
洗濯	23	4.3	43	8.9	0.53	
ペットの世話	17	3.2	23	4.8	0.74	
○子ども一時預かり	25	4.6	30	6.2	0.83	
○食事づくり	35	6.5	34	7.0	1.03	

凡例 ●:①で、需要と供給に3倍近い差があるもの  
○:④で、需要と供給のバランスがとれているもの

①に分類される項目は、ニーズが多いがシーズも多いため、地域内での助け合いが成立すると考えられる。特に「草むしり・庭の手入れ・水やり」は最も人数も多く、バランスがとれている項目である。ただし、表12に●印で示すようにニーズとシーズが3倍と差が大きいものもあり、「粗大ゴミ出し・家具移動」は、地域外の人材確保が必要な場合も生じると想定される。

②に分類される項目は、ニーズが大きいがシーズが不足しており、地域外からの人材確保の検討が必要な項目である。送迎サービスやパソコンアドバイスなどは、実施方法によっては、一人で複数人にサービスを提供することも可能であり、工夫次第では実施可能と考えられる。町内役員の代行は、地域外の人材で補うことが困難であろう。高齢化により町内役員の負担感が増大している場合、自治会運営のあり方自体の検討が必要と思われる。

③に分類される項目は、シーズが豊富であるため、ニーズは多くないが、地域内で十分に対応可能な項目である。この項目は高齢になるほど必要とされる傾向があるものであり、将来的にニーズは更に高まると考えられる。

④に分類される項目は、ニーズとシーズがともに小さいため、双方のマッチングが困難であり、助け合いのしくみとして実施するのは難しい項目と考えられる。

#### 5.4 小括

地域内の助け合いのしくみとして行える支援項目と、取り組みにくい項目、実施するためには外部からの人材確保を検討する必要がある項目が浮かび上がった。助け合いのしくみとしては、地域内完結型ではなく、外部の人材を含めたシステムの検討が必要となる。

### 6 地域での助け合いの実践事例

#### 6.1 明舞団地での助け合いのしくみの試み

明舞中央センター2階の空き店舗を利用した活動スペース“明舞まちづくり広場<sup>注3)</sup>”において、2007年7月から2008年3月まで、NPO法人神戸まちづくり研究所が事業コーディネータとして参加している。平日10時から16時の間、NPOスタッフ1名が広場に常駐し、ホームページや広報誌による情報発信、イベント開催などを行なっている。今までの活動スペース（編み物や習字などの活動を住民が実施）に加えて、団地内で活動する団体を紹介したり、セ

ルフサービスでお茶も飲める情報交換スペースを新たに設置するなど、広場空間も充実させている。

具体的な取り組みのひとつに、団地内の助け合いのしくみづくりの試みがある。“明舞お助け隊”として住民ボランティアグループをつくり、スタッフが地域内の「ニーズ」と「できること」のマッチングを担う。2007年9月から、「あなたのできること、できる時間で気軽にボランティア」と住民にボランティア登録を呼びかけた。

ちらしや口コミで、広場にちらほらと訪ねてくる方達がおり、ふたつの活動が立ち上がった。ひとつは、毎週水曜日に広場で活動する子育てで忙しいお母さんが、子どもを遊ばせながらおしゃべりなどしてくつろげる、お母さんのための居場所「ほっとスペース」である。もうひとつは、園芸の好きなボランティアさんが行なう庭の手入れのお手伝い（有償、500円／時間）である。実際に何件かのサービスが行なわれている。

2007年12月末時点でのボランティア登録は、明舞センターで活動する他NPOスタッフが17名、その他一般が14名である。開始から半年未満であり、今後の展開が期待される。5章での団地内の人材バランスの結果にあるように、個人の家に入る必要もないことから、庭の手入れは比較的取り組みやすいサービスであることがうかがわれる。



図5 明舞まちづくり広場

Fig. 5 Activity base

#### 6.2 先行事例

地域内で住民が自主的に助け合いのしくみづくりを行なっている事例の活動状況について、ヒアリング調査を2007年10月に実施した。

対象地は、1967年に兵庫労働金庫と兵庫県労働者住宅生活協同組合が連携して開発した神戸市須磨区にある北須磨団地である。団地内の高齢化率は40%

近くに達しており、住み続けていくためには介護保険などのフォーマルな支援に加えて、地域のインフォーマルな資源も必要だという考え方から、平成18年9月“おたがいさまねっと”が立ち上げられた。おたがいさまねっとの概要を表13に示す。

表13 おたがいさまねっとの概要<sup>3)</sup>  
Table13 Outline of local group

有償ボランティアネットワーク	
会費・料金	利用者・活動者ともに年会費500円 利用者：30分=400円 支払 活動者：30分=200円 受取
会員資格	利用者：原則65歳以上、友が丘地区在住 活動者：年齢・性別問わず
登録者数	ボランティア登録 73人 (H19.09現在)
利用件数	月平均：3.6件 (H18) ⇒月平均：7.2件 (H19) に増加 (H19.09現在)
利用内容・実績	介護保険以外のサービスを実施。 活動内容の上位 (H19.09現在) 1位：庭剪定 (109件) 2位：通院付き添い/移送も含む (23件)

利用件数は、徐々に増えている。利用内容をみると、庭の剪定の件数が圧倒的に多い。戸建住宅も多いため庭の手入れに困る高齢者がいること、また利用者・活動者の双方にとって取り組みやすいことが理由と考えられる。現状はこれらのマッチングを住民の男性1名が担っている。このコーディネータの男性を感じている今後の課題は、以下の2点である。

- (1) 参加者が増えれば一人で担い続けることは困難であり、コーディネータの育成が必要である。
- (2) 地域住民が担うべき福祉サービスかどうかの判断基準の必要性、また公的サービスで行なうべきことと、それではできないことをうまくやりとりできる専門職との連携方法や体制づくりが必要である。

## 7 まとめ

本研究において、得られた結果を以下に示す。

- ①長期経過した団地に対して、バリアフリー化などの物理的環境整備（住棟建替）を実施する場合、エレベーターの設置などにより便利になる反面で、住民同士が偶然に出会いの場が失われることがあり、新たな出会いの場のしきけ等についても計画する視点が必要である。

②自宅の身近な場所に設置するコミュニティ支援拠点は、住民の居場所や新たな関係づくりの場として機能する可能性が捉えられた。今回の取り組みでの誘致距離は約半径200m圏内であった。団地内に配置するためには、更なる詳細な検討が必要であるが、ある程度の数を配置する必要があり、このためには、運営する人材として地域住民の参加が不可欠と考えられる。

③地域全体の生活支援要求と支援提供する人材バランスの比較から、地域内のみで助け合いが展開できるもの、地域外からの人材確保が必要なもの、実施するのは困難な項目が浮かび上がった。居住者の協力と理解が得られれば、助け合いのしくみを実現できることが確認された。

## 謝辞

ヒアリング調査、アンケート調査にご回答いただいた香里団地および明舞団地住民の皆さん、コミュニティ拠点利用調査にご協力いただいた皆さんに心から感謝いたします。

## 注釈

注1) 拠点で使用している住戸は、兵庫県が2004年に認定された地域再生計画「明舞団地再生計画」の支援措置となる「公営住宅の目的外使用」を活用したものである。運営主体は、「地域コミュニティの活動拠点としての使用」を条件として兵庫県が行った公募で選定された。

注2) ニーズ、シーズのそれぞれの割合が人数の1割を超えるものを需要が大きい、1割以下のものを需要が小さいとした。

注3) 明舞まちづくり広場は、平成16年7月10日に街開き40周年記念事業の一環で住民がまちづくりに関するイベント等で使用する場所として、明舞センタービルの空き店舗に設置された<sup>2)</sup>。

## 参考文献

- 1) 室崎千重、神吉優美他：「自宅での居住継続を支える近隣社会環境と住宅環境に関する研究」、平成18年度兵庫県立福祉のまちづくり工学研究所報告集、pp92-101, 2006
- 2) 明舞団地のまちづくり情報発信基地  
<http://support.hyogo-jkc.or.jp/m/mm-hiroba.htm>  
(2008年3月最終訪問)
- 3) 北須磨保育センターホームページ  
<http://www.kitasumahoiku-center.or.jp/sukoyaka/otagai.htm> (2008年3月最終訪問)